

サンファイン・スタッフ株式会社

下記の問題を○・×方式で答えて下さい

1. 傷病者を発見したらまずは反応の有無を確認し、反応がない場合は気道を確保し呼吸を確かめる。30秒間観察して普段通りの息をしていなければすぐに心肺蘇生を開始する。  
○ ・ ×
2. 正常な呼吸がなければ気道を確保した状態で人工呼吸を2回行ったあとに、胸骨圧迫（心臓マッサージ）を開始する。口対口の人工呼吸の実施に躊躇する場合は、人工呼吸を省略して胸骨圧迫のみを実施してもよい。  
○ ・ ×
3. 胸骨圧迫を行うときは、傷病者をやわらかい布団などに寝かせ自分の体重を使って胸骨を圧迫するのがコツである。  
○ ・ ×
4. 胸骨圧迫と人工呼吸を組み合わせる場合は、人工呼吸を2回・胸骨圧迫を30回実施するのを1サイクルとして心肺蘇生を繰り返す。  
○ ・ ×
5. 胸骨圧迫のポイントは、強く・速く・絶え間なく・圧迫解除は十分に、である。圧迫のテンポは1分間に60回程度でリズムカルに行う。  
○ ・ ×
6. AEDを用いた場合、心電図の自動解析の結果「ショックは不要です」などのメッセージが流れたら、電極パッドを外してよい。  
○ ・ ×
7. 熱による生体の組織障害を熱傷（やけど）という。熱による組織破壊を決めるのは温度のみである。  
○ ・ ×
8. 熱傷の重症度の判断基準は、面積・深度・年齢・部位を判定因子とし水泡ができて赤くはれ、強い痛みを感じる段階の熱傷はⅢ度に分類される。  
○ ・ ×

9. 熱傷の応急手当は、まずは冷却したあと軟膏や油類を塗って幹部を保護する。  
患部に衣類が付着している場合はすぐに取り去る。  
○ ・ ×
10. 熱傷の面積が広範囲に及ぶと、血流が低下してショック状態に陥ることがあり、生命の危険にさらされることもあるので軽度の熱傷でも広範囲には注意が必要である。  
○ ・ ×
11. 凍傷の応急処置は、毛布などで全身保温することが重要であり凍傷が疑われた場合は患部をこすったり温めたりしてはいけない。  
○ ・ ×
12. 骨折は完全骨折・不完全骨折・複雑骨折に分類され、複雑骨折とは折れた骨が皮膚の下でずれて内出血を起こした状態のことをいう。  
○ ・ ×
13. 骨折の応急処置は、骨部分をできるだけ動かさず、副子を当てて固定する。  
このとき整復は行わず、そのままの状態固定する。  
○ ・ ×
14. 手指や足指を骨折した場合は、骨折した指以外の指がよい副子となる。  
骨折部の固定は、副子を当てた上から包帯で強く締めつけて動かないようにする。  
○ ・ ×
15. 皮膚の損傷がひどい場合は、骨折部を固定する前に創傷の手当を行う。  
折れた骨の端から皮膚が突出している場合は、骨を戻して傷口を保護する。  
○ ・ ×
16. 骨折すると、激痛が走って膨張や皮下出血がみられ局部が変形したり四肢の骨折の場合は折れていない方よりも短くなることもある。  
○ ・ ×
17. 傷病者に反応があって普段通りの息をしており、心肺蘇生を行わないで経過を観察する場合は回復体位をとらせる。  
○ ・ ×

18. 水泡ができたときは、周囲に広がらないように破って清潔なガーゼや布で軽く覆う。  
○ ・ ×
19. 胸骨圧迫は、胸が 4～5cm 程度沈む強さで胸骨の下半分を圧迫し、1 分間に約 60 回のテンポで行う。  
○ ・ ×
20. 開放骨折のことを複雑骨折といい、単純骨折と対比される。  
○ ・ ×
21. 傷病者に反応がない場合は、気道を確保したあと約 1 分間呼吸の様子を観察し普段通りの息（正常な呼吸）がないと判断した場合に心肺蘇生を行う。  
○ ・ ×
22. 水泡ができる程度の熱傷は、Ⅱ度に分類される。  
○ ・ ×
23. AED の使用を開始したあとは、人工呼吸や胸骨圧迫はいつさい行う必要はなく、専ら AED によって救命措置を行う。  
○ ・ ×
24. たくさんの量の血液が血管の外に出ることを多量出血といい、体内の全血液量の 4 分の 1 が短時間に失われると、生命に危機が及ぶ。  
○ ・ ×
25. 血液が体外に流出する外出血の種類は、毛細管性出血・静脈性出血・動脈性出血があり静脈性出血は傷口から鮮紅色の血液があふれるように出血する。  
○ ・ ×
26. 出血部を直接、圧迫する直接圧迫法は最も簡単で効果的な止血法で四肢の出血ならほとんど直接圧迫法で対処できる。  
○ ・ ×

27. 動脈性出血は出血量が多く、短時間で多量出血によるショックに陥るためただちに止血帯を用いた止血を行う。

○ ・ ×

28. 熱けいれんとは筋肉のこむら返りのことで、大量の発汗が原因で起こる。涼しい場所で安静にし、水分を補給すれば回復する。

○ ・ ×

29. 発汗状態が長時間続き、ショック脱水症状を起こした熱疲労の状態は、熱中症のⅡ度に分類され、体温の上昇はみられないが顔面蒼白などの症状がみられる。

○ ・ ×

30. 熱中症の中で最も重症で危険な状態が熱射病である。死に至る場合もあるので、早急に体温を下げなければならない。

○ ・ ×